いけない電話　　岡本　悠

新太は狂った、馬鹿みたいだと...

面影

なんか雰囲気が良かった

顔だってよく知らない

金髪だったかな、茶髪だったかな

何度か、直接、挨拶した記憶もある

綺麗か、美人で、あることは間違いなかった

俺は、新しい作業所での生活が始まっていたが

おととしの 12 月

気が狂っていた

診察室に、手ぶらで行った時には

担当の先生も、ギョッとしていた

あれは、驚いたと言っていた

俺の担当の、田中さんという女性と

一緒に病院の帰り道を歩いていた

俺は、メガネをかけていなかった

コンタクトレンズをつけているわけではない

異様だった

そして、溜まり溜まった物を

田中さんに打ち明けた

「あの僕、江原さんが好きなんです...」

田中さんは、困惑していた

「そういう好きになっちゃうケースはよくある」と云った

「今の作業所の、ある女性も好きなんですけど、その人よりも好きな感じです」

田中さんは「あの社長さん？」と聴いたが

「いえ、違います」と答えた

別れ際、田中さんに、「それじゃ、江原さんに伝えておいてください」

と云ったが

田中さんは「言いませ〜ん」と言って別れた

俺は、田中さんは、言わないだろうと思った

だから、突然、江原さんの仕事場に電話した

すると、江原さんが出た

そこからは、書くのも馬鹿らしいほど、江原さんに迷惑なことを喋った

そして、簡単に、そして、完全に、フッ　てくれたことで、スッキリした

後日、俺は、田中さん宛てに２通の手紙を書いて

そこから、江原さんにも伝わればいいな、と思って、

謝りの手紙を書いた

作業所で、田中さんに会った時、ファイルにその手紙を大事そうに、挟んでくれていた

その後も、誰かに、愛を伝えられないまま終わる恋もして、そういうモヤモヤする恋も学んだが、江原さんへの恋は、完膚なきまで、フラレテ良かった

俺は、江原さんの仕事場を訪れた時、話声がしたので、物陰に隠れた、それが江原さんだったかはわからないが...

こういう恋は実らないね、絶対、少なくとも、俺の場合は...

「完」